=論説=

バフリー・マムルーク朝後期のナイル治水事業
――ジスル・マンジャク建設の経緯を中心に――

吉　村　武　典

はじめに

バフリー・マムルーク朝時代（1250-1382）のエジプトでは、首都のカイロ周辺部をはじめとして、スルターンの主宰する大規模な水利事業が多く行われた。それらは、灌漑水利、水運、軍事と目的が多岐にわたる。スルターンが執り行った大規模水利事業の多くはスルターン・ナースィル・ムハンマド al-Nāṣir Muḥammad b. Qalāwūn 第3期治世（在：1310-1341）までに集中し、政治、社会的に混乱期とされる14世紀後半になるとほとんど事例がみられなくなる。佐藤次高は12～14世紀の大規模な灌漑水利にはその建設過程において、アミールによる分担や労働力（農民）の提供など共通性が見られるが、その分担の基準については不明であるとしている(1)。また、筆者はこれまでにバフリー・マムルーク朝中期のスルターン・ナースィル・ムハンマド第3期治世に行われたカイロ西部での運河掘削事業について注目し、バフリー・マムルーク朝時代の前半期に行われた大規模な水利事業と共通の手法が取られつつも、工事区間の国庫による買収や立ち退きに関して保障が行われた点などの特異点についても指摘した(2)。

本稿ではスルターン・ナースィル・ムハンマド没後の1348年にギザとローダ島の間に建設されたジスル jisr、別名ジスル・マンジャク Jisr Manjak として知られた水利施設の建設過程を取り上げる。これまで、このジスルの建設事業について分析した専論は管見の限りなく、ドルス M. Dols がこの建設事業の背景となった飲料水の高騰と人夫の賃金について触れている程度である(3)。この建設事業について最も詳細な記事を残している、15世紀のエジプトの歴史家マクリーズィー Aḥmad b. al-Maqrīzī は、「エジプトにおいて課税された金額としてはこれ以上にないほど多かった」とこの建設事業を評している(4)。また、建設過程、手法についてもそれまでの大規模水利事業とは極めて異なる手段が取られた。本稿ではこのジスル・マンジャクを対象として、その背景、過程を分析することで14世紀の大規模水利における行政慣行の変化について考察する。

1. エジプトの水利機構

さて、本稿で取り上げるジスル jisr/pl. jusūr とはいかなる水利施設であろうか、これについて前近代のナイル川を利用したエジプトの水利機構について解説する。エジプトにおけるナイル川の水利機構は大きく分けて次のような分類ができる：

①政府管理のジスル（灌漑用土手、堰）：al-jusūr al-sulṭāniyya、むら管理のジスル：al-jusūr al-baladiyya

②大規模運河：アレクサンドリア運河、ナースィル運河など

③その他の水利施設：Qanṭara（橋、水道橋）、Birka（溜池、人工湖）、ジスル（土手、堰、橋）

第 1 に①にあげたジスルは、エジプトにおける灌漑農業においてナイル川の水を効率的に農地に引き入れる為の灌漑用のため池＝ハウド khawḍ と隣接する水路や各ハウドを区切る灌漑用の土手である。ハウドはナイル川に沿っていくつも掘られ、そしてそれぞれのハウドを灌漑用の土手であるジスルで区切った。ナイル川が増水すると上流側のハウドに最初に水を貯め、順次ジスルを切って下流方面のハウドへと水を流し効率的に農地に灌漑用水を分配できるようになっていた。また、このハウドへと水を導くためにナイル本流から掘削された運河がハリージュ khalīj/pl. khuljān or khulūj である。ハウドに貯められた水は灌漑用の水路であるトゥルア tur‘/pl. tura‘ を通じて各農耕地や果樹園に分配された[5]。このようなナイル川の伝統的な灌漑法についてマクリーズィーは「エジプトの農地の豊かさはジスルなしには考えられない」と述べている[6]。

このジスルについてアイユーブ朝時代（1169−1250）後期のイブン・マンマーティー Ibn Mammātī は、エジプトに存在するジスルはその建設・維持のために、政府管理のジスル al-jusūr al-sulṭāniyya と、むら管理のジスル al-jusūr al-baladiyya の 2 種類に分けられていると説明している。政府管理のジスルは毎年の管理維持のために租税（ハラージュ）から費用を充て、残金は国庫に送金されることになっていた。一方、むら管理のジスルは各ムクターとむらがその建設・維持費を負担したとされる[7]。また同様にイブン・マンマーティーによれば、アイユーブ朝時代の政府管理のジスルは、ガルビーヤ al-Garbiyya、シャルキーヤ al-Sharkiyya、ジャジーラ Jazīra、クシナー Qusinā の 4 地方に存在していたことを伝えている。当時、エジプトのジスルの多くは政府管理のジスルであったとし、地域別には、下エジプトのデルタ地帯には数が多く、上エジプトには少ないと述べている。この政府管理のジスルの建設・改修に対する必要経費は、官庁 al-Dīwān が徴収し、必要経費の残りは、国庫 Bayt al-Māl に収められた[8]。この分類とジスルの管理はマムルーク朝時代に入っても同様に継続されたが、マクリーズィーはこの政府管理のジスルの経営について、時代の変遷とともに変更が加えられていっ

たことを伝えている。

> かつて、このジスルは各地方の租税 amwāl al-nawāḥī によって維持され、土地の納税請負人 mustaqbilū al-arāḍī がこの管理に当たっていた。彼らは契約した請負金の中から必要経費を支出していたが、やがて政府の官吏がシャルキーヤとガルビーヤの両地方から税を徴収して経費を支出し、残金を国庫に送っていた。その後、王朝の有力アミール a‘yān umarā’ al-dawla がこのジスルを管理するようになり、これがスルターン・ファラジュ al-Nāṣir Faraj（在：1399−1405, 1405−1412）の時代に変更が加えられるまで続いた。各地（al-bilād）で多くの税が徴収されたが、余剰金はスルターンの元（バイト・アル=マール）には送られなくなり、各地の人々がジスルの管理に駆り出されるようになった[9]。

また、カルカシャンディー al-Qalqashandī も同様にイブン・マンマーティーからジスルの分類を引用しているが、それに加えて、彼の時代にはすでに多くのジスルが管理されなくなっていたことを伝えている[10]。この政府管理のジスルに対して、どれくらいの費用がハラージュ収入から充てられたかについては諸説あるが、伝統的におおよそ 1/4 から 1/3 の歳入が充てられたとされている[11]。

このように、マムルーク朝時代の国家的水利事業、特に政府管理のジスルは、租税庁 Dīwān al-Khalāj の管轄であり、工事にかかる費用はイクターからのハラージュ収入から充てられ、残りはバイト・アル=マール（国庫）に納入されるのが慣行とされた。また、政府管理のジスルに関する慣行は、バフリー期後半からチュルケス期にかけて変化し、15世紀には政府管理のジスルは減少したことがうかがえる。むら管理のジスルに加え政府管理のジスルもムクターによる管理が行われるようになっていったと考えられる[12]。

第 2 に③にあげたジスルは灌漑用の土手以外に、防水用の堤防、堤として治水目的に建てられたものである。治水用の堤防としては、1323年にカイロの西側の郊外のブーラーク Būlāq からミニヤ・アル=シーラジュ Minya al-Shīraj[13]までのナイル川の岸に建てられたジスルがあげられる。この年に増水したナイル川の水はカイロ西部にまで浸水し、多くの果樹園、建物に被害を与えた。スルターン・ナースィル・ムハンマドはこれにたいして川沿いに堤防を築いた[14]。また、治水用ではないがスルターン・バイバルス・アル=ジャーシャンキール Baybars al-Jāshankīr al-Manṣūrī（在：1309−10）は1309年にキプロスを中心としたヨーロッパの連合軍のダミエッタ侵攻の知らせに対して、カイロからダミエッタとカイロからアレクサンドリアまでのジスルを建設し、ナイルの増水によってこのヨーロッパの連合軍を水浸しにする作戦を採った。カイロ、ダミエッタ間には上底 4 カサバ qaṣaba[15]（約16ｍ）、下底 6 カサバ（約24ｍ）のジスルが築かれ、その上底には馬が 6 頭同時に走ることができ、カイロからダミエッタまで馬を走らせれば 2 日で到着したと伝えている[16]。以上は軍事目的の特殊なジスルで

あるが、目的としては水をせき止める堤防の役割を持っていた。

以上のようにエジプトの水利施設の機構においてジスルはその用途、場所によってきわめて多義的な意味を持つ重要な水利用語である。本稿で取り上げるジスル・マンジャクはその形態からいえば、水量調節用のダムに近い堤防としてのジスルに分類することができる。

2. ジスル・マンジャク建設の経緯

本章では747−749/1346−1348年（ヒジュラ暦/西暦：以下同）の3年にわたるギザとローダ島の間のジスル建設の概要を見てゆきたい。マクリーズィーの『エジプト地誌 *Khiṭaṭ*』と『諸王朝知識の旅 *al-Sulūk*』の記述を中心に時系列にそってその概要を説明するが、他の史料と比較し適宜説明を加える。

ⅰ. 747/1346年の建設

このジスル建設は、747/1346年に発生したナイル川の異常な減水に端を発する。この年にカイロの周辺でナイル川の水位が異常に減水し、そのため飲料水の高騰を招いた。これに対し人々がその不平を政府に訴えたことが、この場所にジスルを建設することになった最初の要因である。マクリーズィーは *al-Sulūk* においてその様子を「ナイル川の水が、ミクヤースからフスタートの間がハウドになるほど減少した。そしてブーラークからミニヤ・アル=マフラーニー、フィール島からブーラーク、ブーラークからアル=ミニヤまでが一つの道（のように）なった」[17] と描写している。

この結果、水の運搬費 rāwiya al-mā’ は3/4DH（*dirham*）から2DHに高騰したとしていが、この水の運搬費については水の容積の単位は記載されておらず不明である[18]。その後の経緯について *Khiṭaṭ* では次のように記している。

> そのため、人々はこのことをアミール・アルグーン・アル＝アラーイー Arghūn al-‘Alāyī[19]とスルターン・シャーバーン1世 al-Kāmil Sha‘bān b. al-Nāṣir Muḥammad b. Qalāwūn（在：736−37/1345−46）に対して不平を述べた。それで、スルターンは技術者 muhandis とライース・アル＝バフル ra’īs al-Baḥr に相談した。そして、スルターンはアミールたちとカルア al-Qal‘a（シタデル）からナイル河畔に向かった。しかし、ナイルの増水が始まっていたため、土とフスタートにあった砂糖の精製所の陶片 shaqāf、ローダ島にあるそれら廃棄物をジスルの建設のために運ぶことだけが行われた。大量の土砂が船でローダ島へと運ばれた。そして、ギザからミクヤース miqyās（ナイル測量所）に向かって、その間の3分の2の長さのジスルが作られた。そして、ナイルの水は簡単にフスタートの方へと戻った。しかし、土の少なさのためジスルからミクヤースへの接合からは弱められた。ナイルの増水はジスルにより強められた[20]。

アル=バフル al-Baḥr とは元々は海を意味するアラビア語であるが、エジプトにおいては豊饒なるナイル川に対し敬意をこめてアル=バフルと呼ぶ慣習がある。一方、引用した史料中に現われるライース・アル=バフル（「ナイル川の長」）とはどのような人を指すか不明であるが、*al-Sulūk* には749/1348年にマンジャクがジスルを建設する際に同行した人々の中に「船の頭 ru'sā al-marākib」という語が確認できる[21]。これらが同一のものを指すとすれば、ナイル川の船舶航行にかかわった人々の指導的もしくは親方的人物を指すものと考えられる。

また、この建設時に集められた砂糖精製所の陶片とは何であろうか。佐藤次高『砂糖のイスラーム生活史』では、エジプトの地方で収穫・圧搾されたサトウキビから作られた粗糖をさらに精製して、上質な砂糖を生産する精糖所 maṭbaḥ al-sukkar が数多くフスタートに存在していたことについて触れている。イブン・ドゥクマーク Ibn Duqmāq の *al-Intiṣār* に基づく情報では、スルターンの精糖所として 7 箇所、アミールの精糖所として21箇所、商人の精糖所として13箇所、その他の精糖所として21箇所の計65箇所の精糖所を計上している[22]。また、このスルターンの精糖所のうち 1 箇所は政府のため（lil-dawla）とされており、残りはスルターンの私的財産（li-khāṣṣ al-sulṭānī）とされていた[23]。

また、この精糖所からジスルの建設のために集められた陶片 shaqāf とは、この精糖所で使用されたウブルージュ ublūj を含む砂糖精製用の素焼きの土器であったと考えられる。ウブルージュとは下部に小さな穴が開けられた、上部が広く下部が狭い円錐形の素焼きの壺で、粗糖から糖蜜を分離し砂糖を精製するために使用された分蜜用の器具である[24]。砂糖の精製所が多く設置されていたフスタートにおいては、砂糖の精製過程で使用される素焼きの土器が大量に使用されていた。精製過程で糖蜜により目が詰まったり、破損したりしたために廃棄されたこれら素焼きの土器の陶片が大量に存在し、このジスル建設に利用されたと考えられる。

ii．748/1347年の建設

748年の初め（1347年 4 月）には、再び水不足が発生し、人々はスルターンへ上訴を行った。このときスルターン・シャーバーンは有力アミールによって殺害され、その兄弟であるの兄弟のハーッジーが747年ジュマーダーII月の始め（1346年 9 月）にスルターン位（ハーッジー 1 世 al-Muẓaffar Ḥājjī b. al-Nāṣir Muḥammad b. Qalāwūn（在：748-49/1346-47））に就いていた。スルターン・ハーッジー 1 世は、前年と同じく技術者を派遣し測量を行わせ、その結果、技術者たちはギザからカイロまでジスルを建設することを提言し、それにかかる費用として銀貨120,000DH が必要であるという見積書、タクディール *taqdīr* を提出した[25]。

大規模水利事業において、見積書（タクディール）を作成することはこれ以前の建設事業では確認できないが、728/1327年にスルターン・ナースィルがナイルの水を季

節を問わずシタデルの麓まで流す為に、カイロの南方にあるヘルワーンから水路を引くことを計画した。スルターン自ら測量を指揮し、42,000カサバ・ハーキミーヤ[26]（約155km）［sic］という測量結果がでた[27]。ナースィル・ムハンマドはアミールたちにこの建設事業について諮問したとき、ナーズィル・アル=ジャイシュ nāẓir al-jaysh のアル=ファフル al-Fakhr のみが反対し、次のようなやり取りがもたれた。

> アル=ファフルが「誰にその運河 khalīj を掘らせるのでしょうか」とスルターンに尋ねると、スルターンは「軍人 ‘askar たちによって」と答えた。そして、アル=ファフルは「神かけて、もし軍人らを〔そのために〕集めたら、軍人たちはスルターンを恨むでしょう。何年もかかるでしょうし、彼らにはこの掘削事業を行う力はありません。それに加え国庫 3 つ分の費用がかかるでしょう。また、成功するか否かわかりません。スルターンが何も聞き入れなかったら、人々は疲弊し、人々の呪いを受けるでしょう。」スルターンは、この言葉を受け入れてこの事業をあきらめた[28]。

ナーズィル・アル=ジャイシュは軍務庁 Dīwān al-Jaysh の長官で、軍人の給与、糧秣を管理する責任者であった。そのため、このナースィルの計画に必要な経費をかんがみて、反対を唱えたのである。この時にはタクディールの語は現れないが、測量に基づく計画であり、当然それにかかる費用は算出されていたものと考えられる。

ジスル・マンジャクの建設では、このタクディールに基づきカイロとフスタートにおいてナイル川沿いに私的所有物 milk（建物、果樹園など）をもつ人々にジスル建設の税 jibāya を課した。そして、その税の徴収のためにカイロのムフタシブ[29]のカーディー・ディヤー・アッディーン・ユースフ・ブン・アビー・バクル Diyā al-Dīn Yūsuf b. Abī Bakr を任じた。そして、建物が測量され、各 1 ジラー dhirā‘[30] から15DHを徴収した。この測量にはディヤー・アッディーンが任じられた。この測量の結果は7,600ジラー（約500m）に達し、そして実際には約2/3の70,000DHが税として集められることになった[31]。

この建設計画で徴税を担当したディヤー・アッディーンはカイロのムフタシブに 3 回就任し、それ以前にはフスタートのムフタシブも歴任した。彼の不正に対して厳格なムフタシブとしての手腕はスルターン・ナースィル・ムハンマドにも高く評価されたが、不正の追及を恐れるアミールたちからは不興を買った人物として知られている[32]。そのため、その後すぐに彼はムフタシブ、およびそのとき彼が就任していたマンスール病院のナーズィル職 nāẓir al-Bīmārstān al-Manṣūrī[33]などの諸職から解任させられてしまった。そのため、このときに課税された臨時税が実際には徴収されたかは不明である。

さらに、この年のラビーゥII月にはアラブ遊牧民同士の争いが発生し、穀物の強奪が発生するほか、ナイル川の水の減少のため穀物輸送が困難となりその価格が高騰し

た。小麦の価格は1アルダッブ ardabb（容積単位：エジプトでは約90ℓ）あたり30DHから55DHに上がり、大麦の価格は1アルダッブあたり25DHに、豆の価格は1アルダッブあたり20DHに達した[34]。このように、ギザ、ローダ島間のジスルの建設は、都市民の生活の安定のために急務となったことがうかがえる。しかし、スルターン・ハーッジー1世はシリアのアミールたちとの抗争のため、エジプトについて全く考慮を怠るようになってしまったことから[35]、ジスルの建設はこの年は継続されなかった。

iii．749/1348年の建設

748年のジスル建設が不調に終わり、スルターン・ハーッジー1世もアミールとの争いからラマダーン月（1347年5月）に殺害され、彼の兄弟のハサン al-Nāṣir Ḥasan b. al-Nāṣir Muḥammad b. Qalāwūn（在：748-52/1347-51, 755-763/1354-61）がスルターン位を継いだのち、749年に入ると（1348年4月）、ギザとカイロの間でのジスルの建設が本格的に始動した。

副スルターン nā'ib al-salṭana のアミール・バイブガー・アルース Baybughā Arūs[36] とウスターダール ustādār[37] のアミール・マンジャク、ハージブ ḥājib のアミール・キーラーイ Qīlāy をはじめとするアミールたちは、技術者たちを伴い対岸のギザに渡り、ギザとミクヤースの間の測量を行った。そして、748/1347年と同様にタクディール（見積書）を作成した。その合計は約150,000DHで、その内訳は1000本の木材、500本の柱 ṣār、1,000個の2ジラー（約130㎝）四方の石材、5,000袋のシャンファ shanfa[38]、その他の多数の材料が計上された[39]。また、al-Sulūk によれば、この時にカーヒラ運河の取水口からブーラークまでのナイル川沿岸の私有物 milk の所有者に対して70,000DHが課せられたが、これは一昨年の748/1347年の計測に基づくものであった、と伝えていることからその時の課税の際には徴税に至らなかったこと考えられる[40]。

そして、副スルターンのバイブガー、ダワーダールのマンジャク、アミール・シャイフー Shaykhū[41]、そのほかのアミールは、再度ギザへと向かいジスルのことについて専門の技術者らと再検討した。そして、マンジャクがこのジスルの建設の責任者となった。

このアミール・マンジャクはこの建設事業の直前までワジール職に就いていた人物であったが、公金の取り扱いについて他のアミールたちと争いとなり、ワジール職を解任されていた。その際に彼には「ウスターダール職とジスルのこと umūr al-jusūr が残された」とされており、灌漑設備の管理・維持と税務に関する責務が負わされていた[42]。このことが、直接にこの建設事業の責任者に決定した要因かは不明であるが、それ以前のワジールとしての実績とともに、灌漑水利の責任者としてこの任についたと考えるのが妥当であろう。

マンジャクはジスル建設に必要な臨時税をすべてのアミールと兵士、書記、カイロ、フスタートの私有財の持ち主に対し、誰一人として欠けることなく課した（表参照）。そして、この課税に際して、軍務庁の書記 kuttāb al-jaysh に命じて兵士たちの名簿を

提出させ、全てのイクター保有者に課税した。そして、徴税のためあらゆる方面に官吏 shādd、出納係 ṣayrafī、書記 kātibなどが派遣され、執拗に行われたようである。それは「徴税人は年寄りや弱いものや未亡人からまでも税を取り上げ、人々から強引にお金を税として徴収した」ほどであった[43]。

必要な資金を集めると、マンジャクは都市部の下層の人々 ḥarāfīsh（sg. ḥarfūsh）[44]や仕事を求める労働者 fa‘ala（sg. fā‘il）たちに人夫を募集していることと、その賃金として日に1.5DHとパン raghīf 3 枚を用意していると布告した[45]。マムルーク朝時

表：ジスル・マンジャク建設の臨時税

対　象	金　額
イクター保有者	100DNJ 当たり 1 DH
百人長	4,000～5,000DH
その他アミール	適宜（イクター規模に比例）
百人長の書記 *kātib*	200DH
四十人長の書記	100DH
店舗（商人、小売商）*ḥānūt*	1 DH
職人	2 DH
カーヒラ、フスタートの住居 *dār*	2 DH
果樹園	1 フェッダーン当たり10DH
一部の果樹園	1 フェッダーン当たり20DH
粉ひきの石臼	5 DH
カラーファとカーヒラ郊外の墓地とマドラサの貯水槽 *sihrīj*	5 ～10DH
墓地	2 ～ 3 DH
マクアドと道路に面して生計を営む人々	適宜
ブーラークからミニヤ・アル=シーラジュ（ナースィル運河とハージブ池の間）、ナースィル運河、ハバシュ池周辺の新しい住居と果樹園	1 ジラー当たり15DH
カーヒラ、フスタート、カラーファのワクフ施設（モスク、ハーンカ、ザーウィヤ）	適宜（ワクフの規模に比例？）
各地方のキリスト教会、修道院	100～200DH（地方行政官 *wālī* が徴収）
上下エジプトのナツメヤシの木*	1 DH
カーヒラ、ミスルの煉瓦焼成窯、製陶所	1 ～10DH**
廟 *qā‘*	3 DH
倉庫、厩舎	1 DH
隊商宿 *funduq* and *khān*	適宜
大邸宅の保証人 *ḍāmina al-maghānī*	計50,000DH

* *al-Sulūk* では上エジプトのみ
** *al-Sulūk* では 2 DH
参照：*Khiṭaṭ*, 2:168; *al-Sulūk*, 2:764

代の非熟練者の日雇労働の賃金は、事例がほとんどなく不明な点が多いが、723/1323年に行われたブーラークからミニヤ・アル=シーラジュまでのジスルの建設の際には、カイロの貧者が建設に駆り出され賃金として1日あたり1～3DHが支払われたという[46]。

ジスルの建設は748年ムハッラム月の初めから始まりラビーゥII月の終わり（1348年4月～8月）の4カ月で完了した。ジスル・マンジャクの長さは290カサバ（約1.1㎞）、底辺は8カサバ（約30ｍ）、上辺は4カサバ（約16ｍ）に達し、そして、ローダ島からウスター（アルワー）島の al-Jazīra al-Wusṭā/al-Alwā ジスルは長さ230カサバ（約900ｍ）に達した。この事業で石材、土砂、その他の資材を搬送するために使用された船は12,000隻に上ったと伝えられている[47]。

この建設の最中に、あまりの課税の多さにマンジャクに対して他のアミールから蓄財をしているのではないかとの誹謗が起き、兄弟でもある副スルターンのアルースはそれを禁じようとした。しかし、マンジャクはこれに対して、ジスルの建設において日当なしに誰も使役しておらず、またこの作事は人々にとても利益があり、そして悪意を目的とした人々の言葉を取り上げてはならない、と抗弁した。これについてマクリージーは *Khiṭaṭ* の記事の最後に次のように付け加えている、「この事業のために課税された金子は全く秘蔵されなかった。というのもマンジャクは必要なものを除いて、カイロにもフスタートにも邸宅、フンドゥク、ハンマーム、粉ひきの臼、そしてモスク、マドラサ、マスジドといったワクフ、またリズカも教会も残さなかった」[48]。また、イブン・イヤース Ibn Iyās はこの建設事業に用いられた最終的な費用は当初の測量に基づく150,000DHを超え400,000DHに達したと伝えており、また加えてイブン・ドゥクマークからの引用として、マンジャクは費用の中から私することはなかったが、スルターンやアミールたちからはその徴収金の多さから疑いをもたれたことを記している[49]。

以上が3年にわたるジスル建設の概要である。次にこのジスルの建設事業を整理して、それまでの大規模水利との異同について考察してみたい。

3. ジスル・マンジャク建設の特徴と背景

これまで概観したジスル・マンジャクの建設の過程からにおけるいくつかの特徴について考察する。特にジスル・マンジャクの建設において注目すべきは、その建設費用を臨時課税による供出金で賄った点である。冒頭で述べたように、14世紀前半までの大規模水利事業の慣行では、各アミール、イクター受給者が分担して労働力の提供、建設の指揮にあたった。各地の農民にとってそれは力役 *sukhra* の一部となっていたが、アミールらに課せられた負担の基準は不明なままである[50]。そこで、ジスル・マンジャクの臨時税を基にアミールへの課税がどれぐらいの負担であったかを試算してみたい。

ここではアミールへの負担額をイクターのみで換算するとどれぐらいの額になるかについて、1313～15年に行われたナースィル検地のイブラ表を基に計算を行うこととする[51]。イブラ表によれば百人長のアミールは80,000～100,000DNJ（*dīnār jayshī*）のイクターが与えられており、そのイクターへの課税は800～1,000DHで、百人長にはさらに4,000～5,000DHが課せられているので、最大値と最小値をとっても4,800～6,000DHが課税されたことになる。さらにこれに自分の書記に課せられた200DHを加算すれば5,000～6,200DHとなる。彼らの実収入は780,000～900,000DHと算定されていることから彼らのイクター収入のうち約0.7%にあたる比率であると算出される。

同様に、一つ下のランクの四十人長のアミールには30,000～40,000DNJのイクターが与えられていたことから、300～400DHがイクターに課税された。彼らのイブラがおおよそ百人長の35～40%程度であることをかんがみて、四十人長に課せられた金額をおおよそ1,400～2,000DHと推定すると、計1,700～2,400DHとなり、これに書記への課税の100DHを加えると1,800～2,500DHが課税されたと推定できる。四十人長のイクターからの実収入は216,000～365,000DHと算定されているので、それに対する比率はおおよそ0.7～0.8%にあたる比率であると算出される。

また、十人長のアミールも同様に算定すると、これもおおよそ0.7%となる[52]。以上のことから、あくまで推定値ではあるが、アミールらに課せられた臨時税は彼らのイクター収入のおおよそ0.7%を基準値として計算されたと考えられる。ただし、高位のアミールは課税されたカイロ西部に果樹園や邸宅などの私有財産を所有し、また都市部にワクフ施設を建造しているので、実際にはそれらに対する臨時税も加味すると、課税額はさらに高額に上ったことは言うまでもない。

さて、このように臨時税を課すことになった直接の要因を史料には見出すことはできなかったが、政治的要因として、スルターン・ナースィル没後の権力争いがあげられる。すでに見てきたように、747-749/1346-48年の3年間の間にスルターンは3代交代し、いずれもアミールとの間の権力争いが原因である。また、ジスル・マンジャクの建設は、ナイル川の減水・退行という自然現象に対し、社会経済的な安定を図るという公益的な目的があったにもかかわらず、当時の政治背景が色濃く表層化している点も見逃せない。第1年目の747/1346年の建設では、すでにナイル川が増水期に入ってしまっていたため、工事自体が完全には行えず、出来うる限りの対処を行ったことがわかり、結果としてその年の水不足を一時的に解消するにいたった。しかし、第2年目の748/1347年における建設の中断は、不正に対して厳格なことで知られるディヤー・アッディーンに対するアミールたちの警戒によるムフタシブ解任、そしてスルターン・ハーッジー1世のエジプト内政への無関心から発生した。結果、さらなるナイル川の減水によって船による穀物輸送が困難になったため、穀物価格の高騰を招くこととなった。ナイル川の減水は天災であったが、穀物価格の高騰には多分に人災の側面も無視できないといえる。749/1349年においてもマンジャクに対する誹謗がおきたが、これについてもマンジャクに敵対するアミール・シャイフーをはじめとするアミール間の

権力闘争が表面化した結果といえる。

こののち、スルターンが主催する大規模水利事業の事例が14世紀中に見られないため、臨時税を課して大規模水利施設の建設を行うことが新しい政治慣行として定着したかは不明であるが、15世紀前半の822/1419年にスルターン・ムアイヤド・シャイフ Mu‘ayyad Shaykh（在：1412−1221）によってギザのカンタラ・シィビーン Qanṭara Shibīn の改修が行われた。この際にはギザの農地に対し5,000DNの臨時税が計上され、１フェッダーンの農地に対して20DHが課税された。これに対して農民が６DH、ムクターが14DHを支払うことが決められたという事例が見られる[53]。

おわりに

本稿で見てきたジスル・マンジャク建設の過程から、14世紀後半に入ると行政上の変革が始まったことがうかがえた。その背景としては741/1340年以降のスルターン・ナースィル・ムハンマド没後のアミールたちによる権力闘争をあげたが、その他に749/1348年にエジプトで本格化した黒死病の流行による農村人口の減少と、貧困者の都市部への流入がもたらした農村の弱体化などを要因として、それまでの行政慣行を維持できなくなったことが考えられ、この建設事業にはそれが表面化してあらわれた事例としてとらえることができるであろう。

また、政治的腐敗は中央の有力アミールにとどまらず、地方行政官ワーリー wālī の横領、水利機構の維持の放棄に見られるように、政治の末端にまで及び始めていた[54]。農村経営の弱体化はイクター収入を基本とするマムルーク体制に変化をもたらすには十分な要因である[55]。特に大規模水利に様な労働力の集約が必要な事業にはその影響がいち早く現われたといえよう。

疫病の流行、農村支配の弱体化は地方行政制度そのものに影響し、頻発するアラブ遊牧民の反乱の鎮圧、懐柔のためにそれまでのワーリーに加え、より軍事に特化したカーシフ kāshif が上下エジプト地域に常駐するようになる[56]。14世紀におけるナイル治水行政の変化については、この地方行政制度の変革と合わせて稿を改めて検討したい。

注

（１） Sato, T. *State and Rural Society in Medieval Islam: Sultans, Muqta‘s and Fallahun*. Leiden: Brill, 1997, 227−230.

（２） 拙稿「バフリー・マムルーク朝期における水利行政に関する一試論--ナースィル運河の掘削事業の経緯を中心に」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』49−4（2003），19−32.

（３） Dols, M. W. *The Black Death in the Middle East*, Princeton University Press, 1977, 269.

（４） al-Maqrīzī, Aḥmad b.（d. 845/1442）, *al-Mawā‘iz wal-I‘tibār bi-Dhikr al-Khiṭaṭ wal-Āthār*, 2 vols., Cairo: Bulāq, 1270AH（repr., Baghdad, 1975）（hereafter: al-Maqrīzī, *Khiṭaṭ*）, 2:169.

（5） 前近代のエジプトの灌漑農法については、鈴木弘明『エジプト近代灌漑史研究：W・ウィルコックス論』アジア経済研究所、研究叢書343、1986、17−28を参照。

（6） al-Maqrīzī, *Khiṭaṭ*, 1:101.

（7） Ibn Mammātī（d. 606/1209）, *Qawānīn al-Dawāwīn*, ‘Azīz Surayyāl ‘Aṭiyah（ed.）, Cairo, 1943（hereafter: Ibn Mammātī, *Qawānīn al-Dawāwīn*）, 206.

（8） Ibn Mammātī, *Qawānīn al-Dawāwīn*, 232.

（9） al-Maqrīzī, *Khiṭaṭ*, 1:272.

（10） al-Qalqashandī, Shihāb al-Dīn Abū al-‘Abbās Aḥmad（d. 821/1418）, *Ṣubḥ al-A‘shā fī Ṣinā‘at al-Inshā’*, 14 vols., Cairo, 1964; *Fahāris Kitāb Ṣubḥ al-A‘shā*, Cairo, 1972（hereafter: al-Qalqashandī, *Ṣubḥ al-A‘shā*）, 3:515−516.

（11） Ibn Abī Ḥajala Aḥmad b. Yaḥyā al-Tilmisānī, Shihāb al-Dīn（d. 776/1374）, *Kitāb Sukurdān al-Sulṭān*, ed. ‘Alī Muḥammad ‘Umar, Cairo: Maktabat al-Khānjī, 2001, 34; Aḥmad b. Muḥammad b. Muḥammad Ibn ‘Abd al-Salām b. Mūsā, Shihāb al-Dīn Abū al-Khayr al-Manūfī al-Shāfi‘ī（d. 931/1525）, *Fayḍ al-Madīd fī Akhbār al-Nīl al-Sa‘īd*, MS. Dār al-Kutub al-Miṣriyya , Jughrāfiyā 66, p. 40. cf. Ibrāhīm Ḥasan Sa‘īd, *al-Baḥriyya fī ‘Aṣr Salāṭīn al-Mamālīk*, Alexandria, 1983, 28−29.

（12） Sato, *State and Rural Society*, 225−6.

（13） ミニヤ（ムニヤ）・アル=シーラジュ Miniya/Muniya al-Shīraj：カイロから北方約1ファルサフ farsakh（約6㎞）の距離にある地域。アレキサンドリアへの途上にある。（see: Yāqūt al-Ḥamawī（d. 622/1225）, *Mu‘jam al-Buldān*, 7 vols., Beirut: Dār al-Ṣādir, 1957, 5:218, s.v.［Muniya al-Shīraj］）

（14） al-Maqrīzī, Aḥmad b.（d. 845/1442）, *al-Sulūk li-Ma‘arifa Duwal al-Mulūk*, vol. 1−2, M. M. Ziyāda（ed.）, vol. 3−4, Sa‘īd ‘Abd al-Fattāḥ（ed.）, Cairo, 1939−58 （hereafter: al-Maqrīzī, *al-Sulūk*）, 2:251.

（15） 1 qaṣaba はエジプトでは390㎝（嶋田襄平ほか編『新イスラーム事典』平凡社、2002、567）。

（16） al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, 2:48−49.

（17） al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, 2:704.

（18） M. Dolsは水を入れる革袋goatskin of waterあたりの値段としているが、値段から考えればロバなどの駄獣一頭が運ぶ水の量か、容積単位の1アルダッブ（≒90ℓ）と考えるのが妥当であろう。（Dols, M. W. *The Black Death in the Middle East*, 269.）

（19） スルターン・ナースィル・ムハンマドのマムルーク出身。主人のナースィルの生前中には ra’s al-nawba al-jamadāriyya に任命されたが、ナースィルの没後クースに追放される。その後、スルターン・シャーバーンがスルターン位に就くと、アルグーンはシャーバーンとその同母弟のイスマーイールの母親の再婚相手であったために復権し、アミールの最有力者 mudabbir mamlaka となる。しかし、ハーッジーがスルターンに即位後は再びアレクサンドリアに移動させられ、748/1347年にはカイロに連行され殺害された。See: al-Ṣafadī, Ṣalāḥ al-Dīn Khalīl b. Aybak（d. 764/1363）, *al-Wāfī bil-Wafayāt*, 30 vols., Wiesbaden: Franz Steiner Verlag GMBH, in Kommission bei, 1962−2010, 8:355（no. 3788）; Ibn Ḥajar al-‘Asqalānī（d. 852/1449）, *al-Durar al-Kāmina fī A ‘ayān al-Mi’ a al-Thāmina*, 5 vols., M. Sayyd Jād al-Ḥaqq（ed.）Cairo, 1966（hereafter: Ibn Ḥajar, al-Durar al-Kāmina）, 1:376（no. 875）; al-Maqrīzī, *al-Sulūk* 2:756; Ibn Taghrī Birdī, Abū al-Maḥāsin（d. 874/1470）, *al-Dalīl al-Shāfī ‘alā al-Manhal al-Ṣāfī*, 2 vols., Fahīm M. Shaltūt ed., Cairo, 1998（2nd. ed.）（hereafter: Ibn Taghrī Birdī, *al-Dalīl al-Shāfī*）, 1:105.

（20） al-Maqrīzī, *Khiṭaṭ*, 2:167.

（21） al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, 2:761.

(22)　佐藤次高『砂糖のイスラーム生活史』岩波書店、2008、86-88。

(23)　Ibn Duqmāq, Ibrāhīm b. Muḥammad b. Aydamar al-'Alā'ī (d. 1406), *al-Intiṣār li-Wāsiṭa 'Iqd al-Amṣār fī Ta'rīkh Miṣr wa Jughrāfiyyat-hā*, 2 vols. (in 1 bind), Cairo, 1893, 41. また、このスルターンの私的財産とされる精糖所のうち3軒は、スルターン・ハサンの時代に3人の子供にそれぞれ分けられとイブン・ドゥクマークは伝えている。

(24)　佐藤次高『砂糖のイスラーム生活史』岩波書店、2008、53-60。

(25)　al-Maqrīzī, *Khiṭaṭ*, 2:168; al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, 2:724; Ibn Taghrī Birdī, Abū al-Maḥāsin (d. 874/1470), *Nujūm al-Zāhira fī Mukūk Miṣr wal-Qāhira*, 16vols., Faḥīm M. Shaltūt et.al. (eds.), Cairo, 1963-72 (hereafter: Ibn Taghrī Birdī, *Nujūm al-Zāhira*), 10:155.

(26)　qaṣaba al-Ḥākimiyya：ファーティマ朝カリフ al-Ḥākim bi-Amr Allāh al-Fāṭimī の時代に制定された長さの単位。qaṣaba al-Hāshimiyya と同様。1 qaṣaba al-Ḥākimiyya=6azra' al-Hāshimiyya=369.6cm。(al-Qalqashandī, *Ṣubḥ al-A'shā*, 3:512-513)

(27)　当時の地理書によればフスタートとヘルワーンの間は2ファルサフ（約12㎞）とされており（Yāqūt al-Ḥamawī, *Mu'jam al-Buldān*, 2:293-294, s.v. [Ḥulwān])、この測量値と大きく隔たりがある。マクリーズィーによる誤記か誇大表現であるかは不明（al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, 2:302)。

(28)　al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, 2:302.

(29)　muḥtasib：市場監督官。カイロと下エジプトを管轄する「カイロのムフタシブ muḥtasib al-Qāhira」とフスタートと上エジプトを管轄する「フスタートのムフタシブ muḥtasib Miṣr」がエジプトのムフタシブとして任命された。ムフタシブの職務は「善行を勧め、悪行を禁ずる amr bi-l-ma 'rūf wa nahy 'an al-munkar」(=ヒスバḥisba) というムスリム宗教的義務を遂行することを目的とし、市場における食品、商品の取引におけるごまかしや詐欺行為が行われていないかを調べることであった。マムルーク朝の官制では宗教職の第五位の座を占めていた。See：菊池忠純「マムルーク朝時代カイロのムフタシブ――出身階層と経歴を中心に――」『東洋学報』64-1/2 (1983), 131-176; 湯川武「ヒスバとムフタシブ：中世イスラームにおける社会倫理と市場秩序の維持」『国際大学中東研究所紀要』3 (1987-1988)、61-83.

(30)　エジプトにおける1ジラーは約66.5㎝（嶋田襄平ほか編『新イスラーム事典』平凡社、2002、567)。

(31)　al-Maqrīzī, *Khiṭaṭ*, 2:168; al-Maqrīzī, *al-Sulūk* 2:724; Ibn Taghrī Birdī, *Nujūm al-Zāhira*, 10:155.

(32)　Yūsuf b. Abī Bakr b. Muḥammad, Ḍiyā' al-Dīn al-Shamsī, Ibn Khaṭīb Bayt al-Ābār (d. 761/1360) (参照：菊池忠純「マムルーク朝時代カイロのムフタシブ」134-5、153)

(33)　スルターン・カラーウーン・アル＝マンスーリー（在：687-689/1279-90）が、683-4/1284-5年に建設した、病院、マドラサ、廟などを含む総合施設。ナーズィルはマンスール病院の収入・支出を管理するワクフ管財人。菊池によれば、14世紀にこの職に就く人物は、ディヤー・アッディーンと同じくムフタシブを兼任して事例が多く見られる。(菊池忠純「マムルーク朝時代のカイロのマンスール病院について」『藤本勝次　加藤一朗両先生古希記念　中近東文化史論叢』藤本勝次、加藤一朗両先生古希記念会（関西大学文学部歴史地理学科合同研究室内)、1992、47-67)

(34)　al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, 2:728.

(35)　al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, 2:731-32.

(36)　Baybughā Arūs/Rūs al-Nāṣirī：スルターン・ナースィル・ムハンマドのマムルーク出身のアミール。スルターン・ハーッジー1世、スルターン・ハサン時代に副スルターンを務める。754/1353年にアレッポで殺害される。(Ibn Ḥajar, *al-Durar al-Kāmina*, 2:44-45 (no. 1387))

(37) ustādār/ ustādh dār：マムルーク朝時代には軍人に俸給や糧秣を支給する責任者としてアミールから選抜された。(al-Qalqashandī, *Ṣubḥ al-A'shā*, 4:457)

(38) al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, 2:763 では shanf。同頁 ff. 2 の注釈に依れば、麦わら等を入れる袋状の網を指すとしている。shanīf と同意。(see also Dozy, R., *Supplement aux Dictionnaires Arabes*; Hava, J. G., *al-Faraid: Arabic-English Dictionary*)

(39) al-Maqrīzī, *Khiṭaṭ*, 2:168; al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, 2:763.

(40) al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, 2:763.

(41) Shaykhū/Shaykhūn al-Nāṣirī (d. 758/1357): スルターン・ナースィル・ムハンマドのマムルーク出身のアミール。スルターン・ハサンのもとでアターベクを務め、マムルーク朝時代においてはじめて大アミール al-Amīr al-Kabīr の称号を得た。ワジールのマンジャク、副スルターンのアルース兄弟と権力をめぐって争い、勝利した。しかし、後に自らが擁立したスルターン・ハサンとも対立し殺害された。(Ibn Ḥajar, *al-Durar al-Kāmina*, 2:293 (no. 1950); Ibn Taghrī Birdī , *al-Nujūm a l-Zāhira*, 10:324; Ibn Taghrī Birdī, *al-Dalīl al-Shāfī*, 1:346 (no. 1189)

(42) al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, 2:760; Ibn Taghrī Birdī, *al-Nujūm al-Zāhira*, 10:192.

(43) al-Maqrīzī, *Khiṭaṭ*, 2:168.

(44) マムルーク朝時代のカイロやダマスカスなどの都市部に存在した無頼の集団やそれに与する人々。反権力的な暴動に加わる一方、支配者層と密接にかかわる集団もいた。それぞれの集団には指導的立場の人間がおり、一定の統制がとれた集団と考えられている。また、史料によっては被支配者層である都市住民一般 'āmm を指すのみの場合もある。個々では後者の意味を指す。See: Brinner, W. M. "The Significance of the Ḥarāfīsh and their "Sultan,"" in *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 6-2 (July, 1963), 190-215; *EI*[2nd] s. v. [Ḥarfūsh] (written by Brinner, W. M.).

(45) al-Maqrīzī, *Khiṭaṭ*, 2:168.

(46) al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, 2:251.

(47) al-Maqrīzī, *Khiṭaṭ*, 2:169.

(48) al-Maqrīzī, *Khiṭaṭ*, 2:169.

(49) Ibn Iyās, Muḥammad b. Aḥmad (d.ca.930/1524), *Badā'i' al-Zuhūr fī Wakā'i' al-Duhūr*, M. Muṣṭafā ed., 5 vols., Wiesbaden, 1975, 1-1:522. このイブン・イヤースのイブン・ドゥクマークからの引用は、現在刊行されている Ibn Duqmāq, Ibrāhīm b. Muḥammad b. Aydamar al-'Alā'ī (d. 1406), *al-Intiṣār li-Wāsiṭa 'Iqd al-Amṣār fī Ta'rīkh Miṣr wa Jughrāfiyyat-hā*, 2 vols. (in 1 bind), Cairo, 1893; id., *al-Jawhar al-Thamīna fī Sayr al-Khlafā' wal-Mulūk wal-Salāṭīn*, S. 'Āshūr ed., Cairo, 1982 (?) では確認できなかった。

(50) Sato, *State and Rural Society*, 230.

(51) イブラ表及び実収入の算定については、Sato, *State and Rural Society*, 154を使用した。

(52) 同様の計算方式でスルターンのマムルーク親衛隊長 muqaddam al-mamālīk al-sulṭānī、ハルカ騎士団長 muqaddima al-ḥalqa についても算定するとイクターのみの場合は、おおよそ実収入の0.1%となるが、アミール同様に軍事階級への追加税があるとして算定すると0.6%となり、アミールの場合と近似値を取ることができる。

(53) al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, 4:481.

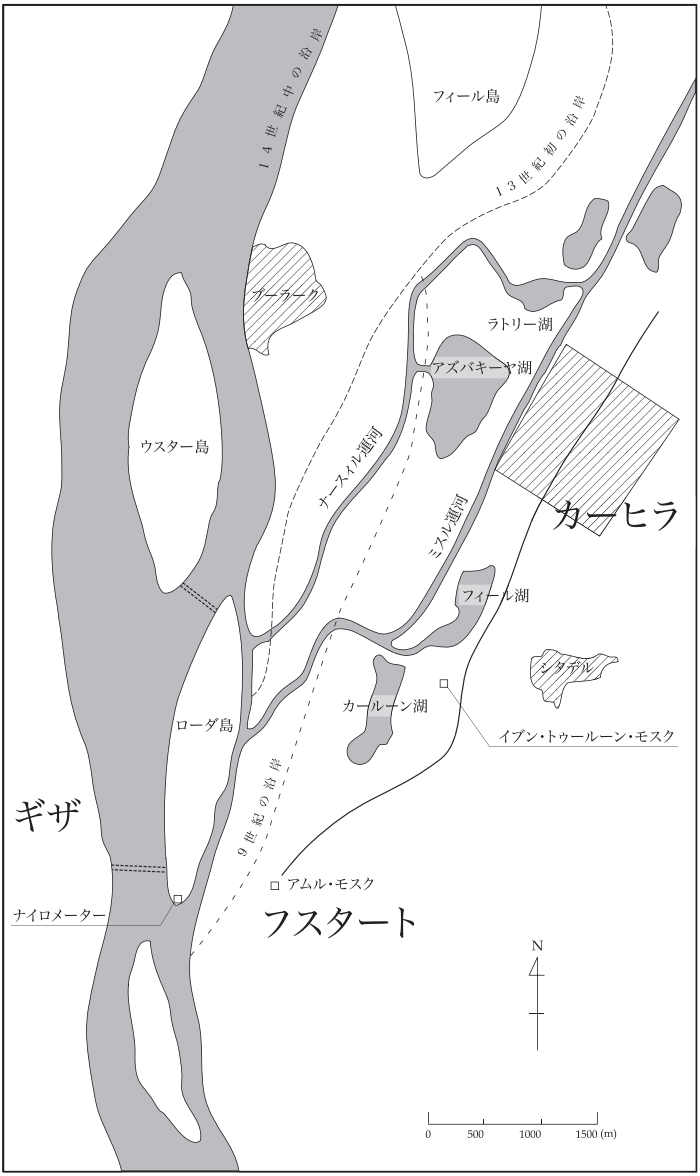
(54) al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, 2:806, 811.

(55) マムルーク朝における黒死病後の社会経済の変動については、Udovitch A. L., R. Lopez & H. Miskimin, "England to Egypt, 1350-1500: Long-term Trends and Long-distance Trade," M. A. Cook

(ed.), *Studies in the Economic history of the Middle East*, London, 1970, pp. 93-128; Borsch, Stuart J., *The Black Death in Egypt and England: Acomparative Study*, University of Texas press/ Cairo: AUC Press, 2005を参照。(cf. 拙評「S. J. ボーシュ著『エジプトとイギリスにおける「黒死病」：比較研究』」『東洋学報』91-1（2008)、029-035）

(56) 14世紀後半のアラブ遊牧民反乱とカーシフの設置については、松田俊道「マムルーク朝前期上エジプトにおけるアラブ遊牧民の反乱」『東洋学報』74-1/2（1993)、061-088を参照。

（本学大学院博士後期課程在籍）



図：14世紀のカイロ周辺とナイル河岸の変遷
（Abu-Lughod, Janet L., *Cairo: 1001 Years of the City Victorious*, Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1971を基に筆者が加筆訂正）